COVID-19が「どこでもドア」を開いた？

坂　入　　正　敏

日本分析化学会の皆様は，北海道と聞いて何を思い浮かべられるでしょうか．都道府県魅力度ランキング13年連続1位や美味しい食材にあふれている，白銀の世界，屯田兵，広大な自然などでしょうか．さすがに，外地と思われた方はいないと思います．昨今は，インターネットに情報があふれているため，北海道について調べて見ると「北海道は，日本列島の最北で，面積83424 km^2（国土の約22％，東京都の約40倍）であり，本島と508の島で構成されている.」という情報が簡単に得られます．著者が学生のころは，インターネットはまだ惣明期（パソコン通信でした）で，コンピュータ（PC）もほとんど普及していませんでした．これだけの情報を得るには，図書館か書店に行って，まず関連の本を捜すことから始まり，とても時間がかかりました．研究で必要な論文を得るのも同様で，まずは移動して関係の雑誌をさがしてコピーしていました．このようにインターネットとPCは，我々の生活だけでなく研究に大きな影響，変革を及ぼしたと言えます．

さて，学会活動に話題を戻します．ほとんどの学協会の北海道支部は，広大な土地（札幌市と函館市の距離は約310 kmほど）に反して会員数が少ない，零細支部です．そのため支部活動を行うには，長距離の移動と時間が必要です．人間とは不思議なもので，このように不利な条件のためか，本学会を含めた多くの学協会の北海道支部では昔から支部活動が活発です．本会北海道支部が中心になって実施している活動として，札幌雪まつり前に実施している冬季研究発表会（雪まつり学会），泊まりがけで1月に実施してきた氷雪セミナー，新緑の季節に実施してきた若手中心の緑陰セミナー等があります．2020年2月までは，先人の始められたこれらの活動を従前に従って実施していましたが，新型コロナウイルスの影響でほとんどの活動が休止になりました．ナノサイズのウイルスの力に驚かされるばかりです．もし，コロナ禍が30年前に起こったら感染が終息するまで，数年間はなすすべが無かったと思います．しかし，21世紀の現代は，幸いにもインターネットやPCが要求に耐える水準に達していたため，WEB会議ソフト（アプリ）を用いることで会議や研究発表などの活動がこれまでとほぼ同様にできています．WEB会議なら5分あれば主催者が遠方の会議にも参加できるので，誰もが「ドラえもんのどこでもドア」を手に入れた状況です．移動に多くの時間と費用を費やしていた北海道の研究者にとっては，時間と場所の制限がなくなったので，禍転じて福となったとも言えます．当然，WEBによる欠点もあり，この1年で急速に変化した支部活動の利点と欠点を適切に評価し，ポストコロナの支部活動を準備しておく必要があると感じています．

まとまりのない内容になりましたが，バーチャルではなく北海道にお越し頂いて，懇親できる日が来ることを祈念して，本稿を終わりにさせて頂きます．

〔Masatoshi Sakairi，北海道大学大学院工学研究院，日本分析化学会北海道支部副支部長〕